令和５年度　横浜氷取沢高等学校国際交流（ニュージーランド）の取組

国際連携Ｇ

１．取組の経緯

令和３年度に、オーストラリア、ニュージーランドとの国際交流を斡旋しているシドニー事務所より、ニュージーランドの学校（リットンハイスクール）から日本の学校との交流希望がある報告を受けた。そこで、本校の生徒を対象にニュージーランドの学校との交流に関して予備調査を行い、一定数の交流希望者がいることを確認したうえで、先方へ交流希望を出した。令和３年度の３月に先方の教員とオンラインで打ち合わせをし、交流を開始させることとなった。令和４年度に引き続き令和５年度もオンライン交流を続け、令和６年度にはリットンハイスクールの訪問を受け入れる予定である。

また、令和５年度より、リットンハイスクールと同様の経緯により、新たにもう一校、ロールストンカレッジとの交流を開始させた。

２．今年度の取り組み

令和５年度は１年生６名、２年生９名、３年生２名の計 17 名で活動した。３月から通算して合計 10 回のオンライン交流を、Zoom を通してった。

３．オンライン交流の具体的内容

以下が実際のオンライン交流の内容である。

回	交流日	交流相手校	交流内容
第１回	３月 15 日	リットンハイスクール	自己紹介
第２回	４月 26 日	リットンハイスクール	自己紹介（集団内で順番に質問する）
第３回	４月 27 日	ロールストンカレッジ	自己紹介
第４回	５月 10 日	ロールストンカレッジ	１対２～３名での日常会話
第５回	５月 31 日	リットンハイスクール	ゲーム（名前を当てる）
第６回	６月２日	リットンハイスクール	日本食の紹介
第７回	７月 20 日	ロールストンカレッジ	お互いの学校紹介
第８回	７月 26 日	リットンハイスクール	日本食の紹介
第９回	８月 31 日	ロールストンカレッジ	放課後の過ごし方
第 10 回	10 月 18 日	ロールストンカレッジ	修学旅行（２年生） キャンパスツアー（１年生）

リットンハイスクールの生徒は毎回 10 名程度の参加である。選択科目で日本語を勉強していることもあり、交流時は日本語、英語両方の言語を用いた。自己紹介から始まり、相手校からの日本語に関する質問など、日本語に関するものや、ニュージーランドの食文化の紹介に至るまで、幅広い話題で話すことができた。

ロールストンカレッジとはZoomのブレイクアウトルーム機能を用いて、１対２～３名の状況で会話をする時間を作ることができた。少人数にすることで、会話が弾んでいたように思われる。お互いの学校紹介や放課後の過ごし方の紹介を行い、質問しあったり答えたりした。また２年生は10月に行った沖縄修学旅行での思い出を発表し、１年生は11月に行った神奈川大学へのキャンパスツアーについて話をした。生徒は毎回スライドを作り、相手が分かりやすくなるよう工夫を重ね、スライド作りや提示方法も回を重ねるごとに進歩しているのが見て取れた。

４．ニュージーランド交流委員の感想（抜粋）

以下は今年度参加した生徒の活動に対する振り返りである。10回の交流を通して、英語学習への動機づけ、英語を用いたコミュニケーションに対する意識の変容が理解できる。

生徒A

いろいろな人のスライドの工夫が分かり、とても勉強になった。また、さまざまな英語の表現を自分の言葉で伝えるのは難しいなと改めて思った。どうしても難しい表現になってしまうから、自分で文がわかりやすく組み立てられるように練習していきたい。次回は日本食のことについて簡単な説明をするので、英語でスラスラと言えるようにしたい。

生徒B

今回の交流は、放課後の過ごし方を英語で話して、その後にロールストーンカレッジの高校生が日本語でやり取りをした。

英語で放課後の過ごし方を伝えるのは少し苦労して、共有のやり方も少し手こずってしまったけれど、相手にわかりやすい英語であることにこだわって伝えることができた。

後半戦では、ロールストーンカレッジの高校生が日本語で質問したりして日本語の能力をあげることで、相手は日本語がうまく出てこなかったり、わからなかったりしていてあたふたしている場面もあった。私たちがアシストしたりした。

５．課題と今後の展望

先方の高校の生徒との交流を通して、生徒の英語によるコミュニケーションに対しての意欲向上が見られた。課題として、毎回の交流が場当たり的なものとなってしまうことがあり、それぞれの回についてどんなテーマを設定するか、どのような学びを生徒ができるかという観点で計画的にオンライン交流を実施する必要がある。

令和６年度は実際にリットンハイスクールが本校を訪問することになっており、ホームステイを通した対面での交流機会を予定している。ニュージーランドの生徒の受け入れが、本校の生徒が英語力を駆使し、コミュニケーションを実践できる貴重な場となり、国際感覚を身に付けるよい機会となることを期待している。

引き続きオンライン交流も継続し、ニュージーランドとの交流を充実させていきたい。